

旭川医科大学基金
令和3年度
活動報告書

Asahikawa Medical University Fund Annual Report 2021 – 2022

ご挨拶

平素より旭川医科大学の活動にご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。私は令和4年4月1日より学長を務めております西川祐司と申します。本学基金のご案内に際し、一言ご挨拶させていただきます。

皆様方には多大なご心配とご迷惑をおかけいたしました。現在、新しい体制のもと、教職員全員で協力して、大学運営の改革を進めております。まだ途半ばではありますが、学内にはお互いに話し合い、議論し合う明るい雰囲気が醸成されてきたように感じております。本学は令和5年11月5日に開学50周年を迎えますが、開学時の初心に立ち返り、皆様にご愛され、誇りを持っていただける大学になるようにいたしますので、皆様方には叱咤激励のほどよろしくお願い申し上げます。

本学の教育理念は、優れた医療人および研究者を育成し、地域医療に根ざした医療・福祉の向上を目指すとともに、国際社会の発展に寄与することです。これまでも本学の教職員は「医師・看護職者の育成」、「研究の推進」、「地域医療の充実」のため活動を展開し、教育、研究、診療、社会貢献のいずれの面におきましても成果を上げてまいりました。これもひとえに、皆様方のご支援の賜物と存じ、深く感謝申し上げます。

私たちは皆様方のご期待に応えるため、今後、大学としての機能を向上させ、地域医療および医学・医療の進歩に貢献する医療者や研究者の養成拠点としての、そして地域医療を支える中核病院としての役割をより多く担っていきたくと考えております。さらに、医師の偏在に伴う地域間医療格差や超高齢社会など、北海道が直面している厳しい課題にも大学全体として積極的に取り組んでいく所存です。私たちは、地域の皆様にご医療・福祉を通じて、幸せで豊かな人生を送り続けていただくために努力を惜しみません。

本学における私たちの新たな挑戦にご期待いただき、これからも見守っていただければ幸いです。本学の財政基盤を安定化させ、より積極的な活動を可能にするため、何卒、「旭川医科大学基金」へのご理解とご協力をお願い申し上げます。

「旭川医科大学基金」は、本学設立時からの理念である『地域医療への貢献』を目的として、2016年に創設いたしました。本基金におきましては、前身の「学術振興後援資金」から引き続き、皆様のご厚意、また、たくさんのご寄附を賜り、深く感謝申し上げます。

現在、本基金は、学生活動や若手研究者への支援に加え、地域医療への貢献のため、幅広い支援を行っています。また、本学は1973年の設置から令和5年で50周年を迎えます。これを記念し、老朽化した学生食堂などの改修を計画しており、より健康的で健全な学生生活を送れるよう、サポートをしていきたいと考えております。皆様のご寄附は、旭川医科大学基金運営委員会での審議・検討のもと、ご寄附の目的に沿って、事業支援に充ててまいります。今後ともより一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。



旭川医科大学
学 長
西川 祐司



旭川医科大学
基金運営委員会副委員長
本間 大

実績報告

令和3年度 実績報告

旭川医科大学基金は、旭川医科大学における教育及び研究活動の充実を図るとともに、地域医療に根ざした医療・福祉のさらなる向上を目指すことを目的として、これまでの学術振興後援資金を発展的に改組し、平成28年10月に創設しました。旭川医科大学基金に対しまして、一方ならぬご理解とご協力を賜り深く御礼申し上げます。

令和3年度収入

寄附受入総額	180件	6,853,667円
前年度からの繰り越し		82,601,486円
利息		893円
その他（過年度返納分）		600円
合計（A）		89,456,646円

令和3年度支出

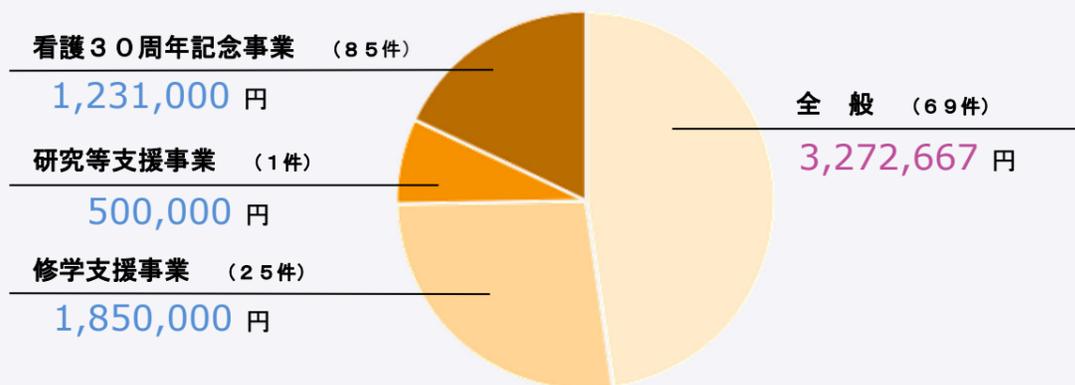
支援事業		
●学部学生海外留学助成事業	0件	0円
●学部学生海外活動助成事業	0件	0円
●学部学生スポーツ国際大会出場助成事業	0件	0円
●大学院博士課程学生支援事業	0件	0円
●留学生支援事業	1件	360,000円
●研究活動助成事業	15件	7,500,000円
●国際学会等派遣事業	0件	0円
●卒業生に対する奨学資金貸与事業	1件	1,200,000円
●地域医療支援事業	2件	1,000,000円
解剖学授業の実用品代		284,680円
看護学科開設30周年記念事業		1,170,685円
事務費		829,356円
合計（B）		12,344,721円

※新型コロナウイルス感染防止のため、海外渡航に係る事業は未実施

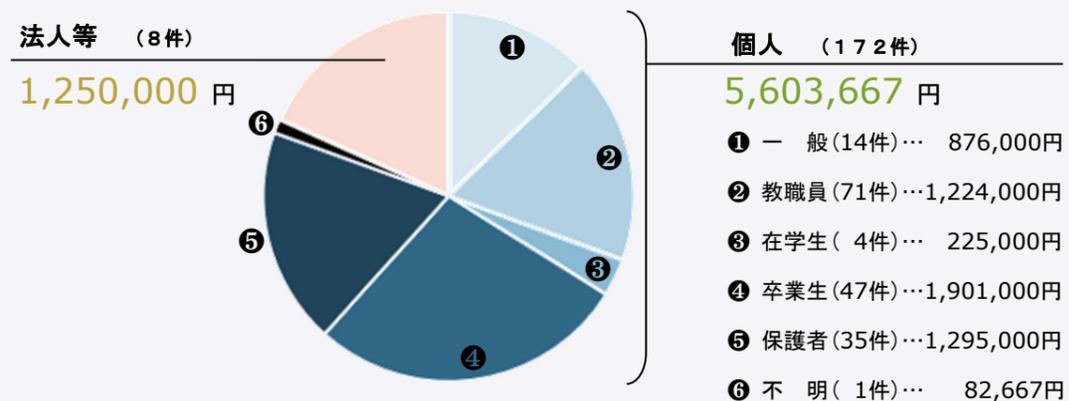
年度末 基金残高（A-B）・・・77,111,925円

令和3年度旭川医科大学基金への寄附内訳

< 寄附目的別 >



< 寄附者属性別 >



称号件数

旭川医科大学基金創設以降にお贈りした会員の称号件数 (累計) は以下のとおりです。

称号区分	寄附金額		個人	法人等
	個人	法人等		
特別栄誉会員	1,000万円以上	1億円以上	0	0
栄誉会員	500万円以上	1,000万円以上	1	1
特別貢献会員	100万円以上	500万円以上	17	1
貢献会員	50万円以上	300万円以上	9	2
賛助会員	10万円以上	50万円以上	107	36

(令和4年3月末現在)



▲ 会員の称号をお贈りした寄附者様のお名前を旭川医科大学病院レストラン「ななかまど」前の廊下に設置しています。

皆様からの温かいご支援は、研究や学生支援など、様々な活動に活用させていただいております。令和3年度はコロナ禍ということもあり、海外留学等の支援事業が実施できなかったため、研究活動に対し例年より厚く助成を行いました。

研究活動助成事業

1	先進医工学研究センター 先天性心疾患治療に向けた自己組織由来組織工学心臓弁の開発	佐藤 康史	助教
2	先端医科学講座 トリプトファン (Trp) 代謝異常に起因する精神疾患発症機序の解明	南 竜之介	助教
3	薬理学講座 がん細胞における低酸素応答と小胞体ストレス応答の関係性の解明	谷内 秀輔	助教
4	病理学講座 (腫瘍病理分野) Mycファミリー遺伝子の過剰発現が肝細胞癌の進展・転移に与える影響の検討	後藤 正憲	助教
5	内科学講座 (病態代謝・消化器・血液腫瘍制御内科学分野) レドックス調節因子Nrf2が肝臓における肥満特異的な代謝制御に与える影響の解明	澤本 一樹	特任助教
6	内科 (代謝・免疫・消化器・血液) レドックス制御因子Nrf2を活性化するグルコラファニンの糖尿病腎症改善効果の検討	別所 暁一	医員
7	小児科学講座 先天性心疾患術後患者の血管内皮機能評価におけるグリコカリックスの有用性	岡 秀治	助教
8	小児科 高度肥満小児の臨床的特徴と遺伝的・環境的因子による影響についての検討	鈴木 滋・山村 日向子	講師・医員
9	外科学講座 (心臓大血管外科学分野) レトロトランスポゾンによる心筋細胞の分裂制御機構の解明と心臓再生治療への応用	小山 恭平	講師
10	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座 シラカバ花粉食物アレルギー症候群マウスモデルによる新規治療方法の探索	大原 賢三	講師
11	耳鼻咽喉科・頭頸部外科 新規頭頸部癌免疫療法開発に向けた胎盤形成分子PEG10の発現・機能・癌抗原性解析	小松田 浩樹	助教
12	耳鼻咽喉科・頭頸部外科 頭頸部癌に対するBrachyuryを標的とした癌ワクチン療法	山木 英聖	助教
13	救急科 局所進行直腸癌への術前化学療法の効果別遺伝子プロファイル探索	武田 智宏	助教 (大学院3年)
14	周産母子センター 電気生理インピーダンス法によるPhase angleを用いた新生児期・乳児期の栄養評価	杉山 達俊	医員
15	病理部 気管支鏡検査・疑陽性症例の新たな細胞診断基準と遺伝子検査フローの確立	宮川 京大	臨床検査技師

※所属はR4. 9. 30時点のものです



先天性心疾患治療に向けた自己組織由来組織工学心臓弁の開発
佐藤 康史（先進医工学研究センター）

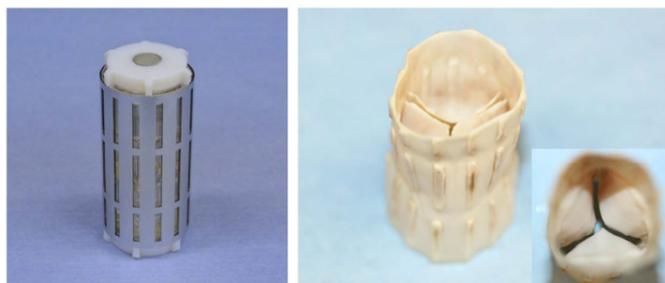


■研究概要

先天性心疾患などによる心臓弁形成不全や重度の弁膜症など、心臓弁が閉鎖不全や狭窄などにより機能不全に陥った際には、金属やカーボン、異種動物組織でできた人工弁への置換手術が行われます。しかし、現在使用されている人工弁は血栓形成や石灰化などによる機能低下や、服薬による副作用など長期間使用することに課題があります。特に若年患者においては成長に従いサイズミスマッチが生じることや、小児患者に適応可能な人工弁は存在しないことから、先天性心疾患患者への治療選択肢は限られています。このような課題を解決するため、我々は移植後に正常組織へと再生し、患者の成長に合わせてサイズも大きくなるなど、長期間にわたり機能する新たな人工弁の開発を行っています。本研究では、自己の体内で移植用組織を作製する「生体内組織形成術」を用いて、自己組織由来の人工弁を作製し、その機能評価を行いました。

■研究成果（進捗）

心臓弁の構造を模して設計した人工弁作製用鋳型を3Dプリンターを用いて造形し、大動物の皮下に埋入を行いました。3か月後に皮下から摘出し、鋳型を抜去することで、自己組織のみからなる人工弁「バイオバルブ」を作製しました。バイオバルブを心臓の拍動流を再現した循環回路に設置し弁の機能を評価したところ、拍動流に同調した弁の開閉が確認でき、人工弁として良好な性能であることを確認しました。さらに、大動物の肺動脈弁位にバイオバルブを移植したところ、手術中に破損することなく移植することが可能であり、移植後には超音波エコーにおいて心臓の拍動に応じた弁の開閉が確認でき、顕著な逆流も観察されませんでした。このことから、バイオバルブは人工弁として有効に機能することが示唆されました。



人工弁作製用鋳型（左）と開発した人工心臓弁（右）

■今後の展望

本研究において、皮下で作製したバイオバルブが人工弁として有効に機能する可能性が示唆されました。今後は弁機能をより向上させるため形状の最適化を行うと共に、移植した人工弁の長期間における安全性や有効性、組織の再生や成長などの評価を行う予定です。心臓弁治療における新たな治療方法を確立すべく、臨床応用に向けた研究開発を実施していきたいと思っております。

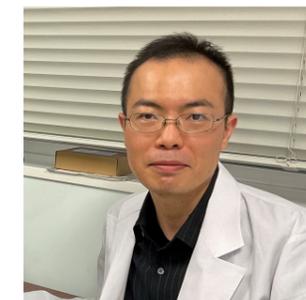
■寄附者様への謝辞

この度は旭川医科大学基金へ多大なご支援を賜り、誠にありがとうございます。若手研究者にとってこのような助成金は、新たな研究課題に挑戦していく上で非常に重要な原動力となります。本研究助成事業支援いただけたことにより経済的・精神的に支えとなり、安心して研究を進めることができました。この支援に応えられるよう今後も研究に励み、研究成果を社会実装するため努力していきたいと思っております。



Mycファミリー遺伝子の過剰発現が肝細胞癌の進展・転移に与える影響の検討

後藤 正憲（病理学講座 腫瘍病理分野）



■研究概要

日本における肝臓に生じる癌患者の大部分は肝細胞癌を占め、5%ほどの割合で胆管癌患者が見つかります。また、非常にまれではあるものの肝細胞癌と胆管癌が混ざった混合型肝癌も存在し、肝細胞癌よりも予後不良の癌として知られています。混合型肝癌の発生機序は十分に分かっておらず、現在のところ肝切除以外の有効な治療法も確立されていません。

肝癌では様々な癌遺伝子の発現が増加しており、複数の遺伝子の変化が影響しあって癌の特徴を形作っているものと考えられます。Mycとその類縁のMycnは肝癌の中で発現が増加していることがわかっている癌遺伝子です。両者は類似した機能をもっていると考えられてきましたが、近年、分子レベルで異なる作用を示すことが明らかとなってきました。我々は肝癌におけるMycとMycnの機能的な違いを調べるために、Sleeping Beauty (SB) トランスポゾンシステムと尾静脈からのハイドロダイナミック注入法 (HTVi) を組み合わせて、肝癌の中で発現が増加している様々な癌遺伝子とともにマウス肝細胞にMycまたはMycnの遺伝子を導入し、誘導される肝腫瘍の特徴を調べています。本研究では、活性型AKT (myristoylated AKT)、活性型YAP (YAP^{S127A})と共にMycまたはMycnを導入し、肝癌の誘導を行いました。

■研究成果（進捗）

AKT/YAP/MycとAKT/YAP/Mycnを誘導したマウスの腫瘍は、両者ともに肝細胞癌と胆管癌が混じりあった混合型肝癌を示しましたが、AKT/YAP/Myc腫瘍では胆管癌を占める割合が多く、AKT/YAP/Mycn腫瘍では肝細胞癌が多く形成されていました。Notchは細胞の増殖や分化に関与している遺伝子ですが、肝細胞から胆管癌が形成される場合、Notch経路の活性が重要であることが報告されています。そこで、Notch経路の遺伝子発現の変化について調べてみるとMycnを導入した腫瘍ではNotch経路の抑制が強く引き起こされていることが明らかとなりました。この結果からAKT/YAP/MycとAKT/YAP/Mycnで混合型肝癌の成分に差が生じる原因には、Notch経路の活性化の違いが影響している可能性が示唆されました。また、細胞分化に関わる他の因子としてTgfβシグナルについても解析をおこなったところ、Notch経路の遺伝子発現と同様AKT/YAP/Mycn肝腫瘍でより強く抑制されていました。したがってTgfβも胆管癌と肝細胞癌の割合を決定づける際に関与している可能性があります。

■今後の展望

今回の解析では、マウス発癌モデルを用いてNotch経路の活性化の違いが混合型肝癌の胆管癌形成に影響している可能性を示しました。しかし、Notch経路の活性化がヒトの混合型肝癌においても関与しているのかは不明です。今後はヒトの病理検体を用いて混合型肝癌とNotch経路の関連を明らかにし、この経路を阻害することが混合型肝癌の治療標的となりうるか解析していきたいと考えています。

■寄附者様への謝辞

旭川医科大学基金へご支援いただき、ありがとうございます。本基金により助成していただけたことはこの上ない励みとなり、研究を進める原動力となりました。ご支援いただいた全ての方々に、この場をかりて深くお礼申し上げます。



レドックス制御因子Nrf2を活性化するグルコラファニンの
糖尿病腎症改善効果の検討

別所 瞭一

内科（代謝・免疫・消化器・血液）



■研究概要

糖尿病は、飽食の現代社会において克服すべき国民病です。糖尿病は多臓器に合併症を引き起こし、代表的な糖尿病細小血管合併症の一つである糖尿病腎症は、長年にわたり本邦における末期腎不全の原因疾患として最多であり、多くの患者の生活の質の低下と生命予後の短縮をもたらします。一方で、糖尿病腎症に対する積極的・特異的な治療法はなく、有効な治療薬の開発が強く求められています。転写因子Nrf2 (NF-E2-related factor 2)は、細胞のレドックス状態を制御するマスター因子であり、その活性化は強力な抗酸化作用を有するため、腎保護効果が期待されています。しかし現在のところ、安全性に関する懸念から、有効なNrf2活性化剤は臨床応用されていません。そこで、私たちの研究グループは、ブロッコリースプラウトなどのアブラナ科野菜に含まれ、Nrf2活性化作用を有するグルコラファニンに着目しました。グルコラファニンは生体内で活性体のスルフォラファンに変換され、Nrf2抑制因子であるKeap1 (Kelch-like ECH-associated protein 1)を阻害することによりNrf2を活性化します。本研究では、グルコラファニン/スルフォラファンの糖尿病腎保護効果を検討しました。

■研究成果（進捗）

グルコラファニンは、糖尿病モデルマウスの腎組織において、特に尿細管障害や腎線維化を軽減しました。その作用メカニズムとして、腎近位尿細管上皮細胞においてブドウ糖とナトリウムの再吸収を担う分子である、SGLT2 (Sodium-glucose co-transporter 2)の発現を抑制することにより、腎臓の代謝異常を改善している可能性が考えられました(第65回日本糖尿病学会年次学術集会で発表)。一方で、興味深いことにグルコラファニンは、Nrf2遺伝子を欠損させた糖尿病モデルマウスにおいても腎保護効果とともに、血糖値の改善効果を有する可能性が明らかになりました。この結果は、グルコラファニンが、Nrf2活性化を介さない腎保護および血糖降下作用を持つ可能性を示唆しています。その分子機構を解明するために、現在追加実験を行っています。

■今後の展望

Nrf2遺伝子を減少させたヒト近位尿細管上皮培養細胞などを使用した追加実験を行った後、論文投稿を予定しています。本研究成果により、グルコラファニン/スルフォラファンは、糖尿病腎症に対し有効で安全なNrf2活性化剤である可能性が示唆されました。現在、海外において糖尿病性腎症を含む慢性腎臓病患者に対するスルフォラファンの臨床試験が行われており、ヒトに対する有効性が明らかになるかについて注目しています。本研究により、Nrf2活性化を介した新しい腎保護分子機構や、食品由来の生理活性物質の安全性や有効性という点について、新たな知見を提供したいと考えています。

■寄附者様への謝辞

この度は、旭川医科大学基金への多大なご支援を賜り、誠にありがとうございます。本研究活動助成事業により、希望する研究試薬や機器の購入が可能となりました。また、採択いただいたことで、さらに研究意欲が増し、研究計画を膨らませることができました。この場をお借りし、寄附者の皆様に深謝申し上げます。これからも、治療薬の乏しい糖尿病腎症の病態解明や新規治療法の実現に貢献し、旭川から新しい研究成果を発信できるよう励んでまいります。今後ともご支援の程、何卒よろしくお願い申し上げます。



シラカバ花粉食物アレルギー症候群マウスモデルによる
新規治療方法の探索

大原 賢三（耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座）



■研究概要

日本における季節性アレルギー性鼻炎はスギ花粉が主な原因ですが、北欧や北海道での主要原因はシラカバ花粉です。シラカバ花粉症に関連する花粉食物アレルギー症候群(PFAS: pollen food allergy syndrome)はシラカバ花粉症患者の約70%に影響を及ぼし、北欧では最も多い食物アレルギーです。約9%のPFAS患者がアナフィラキシー症状を経験したという報告がありますが、確立されているPFAS治療法はなく患者は厳格な原因食物の回避を余儀なくされ、著しくQOLを損ねています。PFASの発症機序に関してはI免疫グロブリンEの関与を示したものが多いですが、詳細な免疫学的機序は未だに解明されていません。PFASマウスモデル作製の報告は過去にないため、マウスモデル樹立を目指し、PFASの発症機序を解明、新規治療法を開発することを目的としました。

■研究成果（進捗）

シラカバ花粉をマウスに経鼻投与する実際の状況に類似したPFASマウスモデル作製を目指しました。PFASマウスモデルの前段階として、シラカバアレルギーマウスモデルの作製に成功しました。アレルギー症状の客観的データとしてアナフィラキシーを用いました。

マウスに週2回シラカバ花粉を経鼻投与し、4週後にシラカバ抗原を全身投与しました。アナフィラキシー症状の1つとして直腸温低下が確認されました。投与後2週、4週で採取したマウス血清において、シラカバ花粉に対する免疫グロブリンの増加のみならず、シラカバ関連PFASの原因食物として最も多いリンゴ主要抗原Bet v 1に対する免疫グロブリンの増加を確認することができました。すなわち、マウスにシラカバを投与するとリンゴに対する抗体が産出されることが証明できました。これはシラカバ抗原とリンゴ抗原の相同性性によると考えられました。

■今後の展望

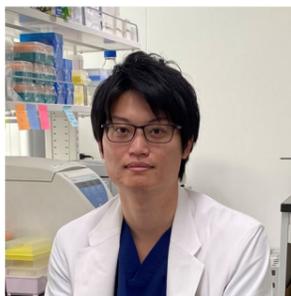
シラカバで感作したマウスにリンゴ抗原を経口投与し、口腔周囲の掻痒感、浮腫などのPFAS症状が発現するか検討し、それに関わるメカニズムを解明していきます。

■寄附者様への謝辞

アレルギー性鼻炎領域での研究費の獲得は患者の母集団の多い、スギ花粉症、ハウスダストやダニを誘引とする花粉症に対するものが主流です。今回、日本においては北海道の花粉症とも言えるシラカバ花粉症、それに伴う花粉食物アレルギー症候群の研究を寄附者様のご協力により遂行できたことを心より深謝いたします。そして、今後もこの研究を発展させるべく精進いたしますので、何卒よろしくお願い申し上げます。



局所進行直腸癌への術前化学療法の効果別遺伝子プロファイル探索
武田 智宏（救急科）



■研究概要

近年、局所進行直腸癌に対する術前治療が重要視されていますが、治療反応性を予測するバイオマーカーはわかっていません。化学放射線療法には局所制御、化学療法には遠隔転移制が期待されますが、術前化学療法でも局所に著効する症例も見られることがあり、放射線治療をせずに済むメリットがあります。また、そのような有効例では長期生存が期待されることから、術前化学療法の適格例を予測するためのモデルが必要と考えられます。本研究では、術前化学療法を行った局所進行直腸癌手術症例を対象に、次世代シーケンサーによるゲノム解析と病理組織学的解析（免疫染色）を行い、遺伝子変異パターンや各シグナル経路の活性化の関連性を調べることにしました。

■研究成果（進捗）

手術標本のTargeted sequencing解析が完了しており、30例にTP53変異、15例にKRAS変異、13例にAPC変異、40例にSMAD4変異、4例にFBXW7変異、3例にPIK3CA変異、2例にNRAS変異が認められました。TP53とKRASの共変異がみられた11例では術前化学療法の効果が低い傾向があり、TP53とKRASの共変異は効果予測因子である可能性が考えられました。また、TP53変異はp53免疫染色のパターンと一致率が高く、AIソフトで定量的に評価することができています。

■今後の展望

術前生検標本のTargeted sequencing解析を行い、手術標本の解析結果と比較することで、術前化学療法による遺伝子プロファイルの変化の有無を調べます。また、各シグナル経路におけるタンパクの免疫染色を行い、遺伝子プロファイルとの関連を探索します。さらに、RNA解析を加えることで、より詳細な分子プロファイルを明かにする予定です。治療反応性を予測するバイオマーカーが判明すれば、より効果的な術前治療を選択することや、不要な術前治療を回避する（有害事象の回避）ことが期待できます。また、機能性RNAの発現解析により新規の治療標的の発見の可能性も秘めており、波及効果は高いと考えています。

■寄附者様への謝辞

この度は旭川医科大学基金への多大なご支援を賜り誠に有難うございました。局所進行直腸癌に限らず、がん治療は手術だけでなく集学的治療が必要です。ゲノム情報を活用することでさらに治療成績を向上させることが可能と考えております。研究を行うにあたり、特にゲノム解析には多大な費用がかかりますが、皆様のご支援により研究を進めることができます。この度のご支援に対し、少しでもお応えできるよう今後も努力していきたく思います。ありがとうございました。



気管支鏡検査・疑陽性症例の新たな細胞診断基準と
遺伝子検査フローの確立
宮川 京大（病理部）



■研究概要

気管支鏡検査では組織の採取量が少なく、肺癌の診断や遺伝子検査に至らない疑陽性症例が少なくありません。また、肺癌は発見時に既に進行して治療を急ぐケースが比較的多く、現在の組織診・遺伝子検査のフローに代わる、より迅速な検査フローが確立すれば、患者さんの治療に大きく貢献すると考えられます。そこで、組織診より診断・遺伝子検査が迅速に行える細胞診をベースにした遺伝子検査について研究を行いました。

■研究成果（進捗）

ドライバー遺伝子陽性の肺腺癌について、細胞形態を解析しました。有効な分子標的治療薬の存在するBRAF V600E遺伝子変異やMETex14 skipping、そして最も頻度の多いEGFR変異を有する肺腺癌において、細胞形態の特徴に関する新たな知見が得られました。その結果は、日本臨床細胞学会で発表しました。

■今後の展望

これまでの研究をもとに、従来の気管支鏡検査（組織診＋細胞診）で癌の診断に至らなかった症例において細胞形態の特徴を解析していきます。そして、EGFR変異において、細胞診材料からタンパクの発現をスクリーニングする技術や、さらに遺伝子変異の存在を確定する技術の確立を目指しています。長期的な研究でコロナ禍により実施も少々遅れておりますが、実験に必要な物資を購入し、解析技術の精度や再現性に関する検討や、解析材料である細胞診検体の収集も進んでいます。

■寄附者様への謝辞

この度は旭川医科大学基金への多大なご支援を賜り、誠にありがとうございます。予後不良な進行肺癌に対して迅速な分子標的治療を実現することは、医療者としても重要な使命と感じておりましたが、資金面で研究活動が困難な状況であったため、非常に助けとなりました。今後ご支援に報いるため、さらなる研究成果を生み出し、発表して参ります。

地域医療支援事業

道北・道東地域における歯科皮膚科連携強化への取組



岸部 麻里（皮膚科学講座/准教授）

皮膚疾患のなかには口腔粘膜が障害される天疱瘡や口腔内扁平苔癬、歯科金属アレルギーによる全身性接触皮膚炎や異汗性湿疹、歯性病巣による掌蹠膿疱症など、治療において歯科医との連携が欠かせない疾患があります。しかし、歯科医科連携に苦慮することが多く、これを改善したいと考えていました。道北・道東地域における歯科皮膚科連携の強化を目的として以下の活動を行いました。

1) 歯科医を対象とした歯科医科連携に対する意識調査

診療間連携の課題を明らかにするために、掌蹠膿疱症診療に関して歯科医を対象にアンケート調査を行いました（旭川医科大学倫理委員会：承認番号 20115）。その結果、疾患の原因について歯科医と皮膚科医の考えにギャップがあることが明らかとなりました。また、皮膚科医からの情報提供に課題があることが明らかとなりました。調査結果は「歯科医師を対象とした掌蹠膿疱症と歯科治療に関するアンケート調査 道北・道東地域における医科歯科連携の強化に向けて」のタイトルで2021年11月発行の日本皮膚科学会雑誌131巻121号に掲載されています。アンケート調査結果については、回答して下さった歯科医に書面にてご報告しました。

2) 金属パッチテスト実施施設の一覧の配布

上記1)の結果、歯科金属パッチテストの依頼先がわからない歯科医が多いことがわかりました。旭川医科大学の関連施設および同門の開業医の協力のもと、パッチテスト実施施設の一覧を作成し、上記調査に協力いただいた歯科医に一覧を配布しました。

3) 歯科医科連携セミナーの開催(2022年7月22日)

歯科医科の連携を促進するため、オンラインセミナーを開催しました。皮膚科医と歯科医が、それぞれの立場から掌蹠膿疱症治療について講演を行いました。計47名（歯科医32名、皮膚科医12名、耳鼻科医1名、薬剤師2名）が視聴し、高い関心があることがわかりました。

基金は、アンケート調査に要した参考資料および書籍の購入、論文作成および投稿に関わる費用、結果報告等に使用した印刷代および郵送料などに適切に使用しました。今後、掌蹠膿疱症以外の疾患についても、歯科医科連携を深めるような活動を行い、道東・道北における地域医療の質の向上に努めたいと考えています。



留学生支援事業



Mohammad Sayful Islam

大学院博士課程（バングラデシュ人民共和国）

性分化疾患原因遺伝子の究明

この度は、旭川医科大学基金によりご支援をいただきましたことに、心より御礼申し上げます。

私は、生化学講座でステロイドホルモン産生酵素の遺伝子変異が、その活性に及ぼす影響と性分化疾患発症との関わりに興味を持って研究を行っています。これは、母国のバングラデシュでは、遺伝性の性分化疾患の症例が他国に比べて多く報告されているからです。生殖腺で産生される性ス

テロイドは、性分化に必須であることから、その産生に関わる酵素遺伝子の変異によるホルモン量の低下は、性分化疾患の原因になります。私の所属研究室では、酵素活性を簡便に測定する新たなシステムを開発してきました。そして、私は、このシステムを利用して性ステロイド合成酵素の1種であるHSD17B3の多様な遺伝子変異由来の変異タンパク質の酵素活性を調べることで、それぞれの変異が性分化疾患の原因となるかどうかを明らかにして、国際誌に筆頭著者として論文を発表いたしました。

この成果は旭川医科大学基金より御支援いただいたことにより、普段の生活に不安なく研究に集中できたからであり、感謝の気持ちでいっぱいです。今後も、研究活動に邁進し、遺伝性の性分化疾患の原因究明を進められればと考えております。

「旭川医科大学医学部看護学科開設30周年記念事業」へのご支援の御礼

旭川医科大学医学部看護学科長 服部 ユカリ

平素より旭川医科大学の活動に多大なるご支援を頂き、心より感謝申し上げます。

また、旭川医科大学医学部看護学科が、令和8年に開設30周年を迎えるにあたり、看護学科開設周年記念行事と併せて、学生の活動や大学における教育、研究及び診療の支援に資するため、令和3年12月に旭川医科大学基金に「旭川医科大学医学部看護学科開設30周年記念事業」を立ち上げご寄附を募ることといたしました。これまでこの事業に多くの皆様から温かいご支援を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。

おかげさまで、看護学科開設30周年を迎えるにあたり、前段として令和4年3月5日、旭川医科大学医学部看護学科25周年記念事業記念式典をオンラインにて挙行することができました。この25周年記念式典では、西川祐司副学長（当時）のご挨拶、看護学科長のご挨拶の後、本学病院原口眞紀子看護部長と本学名誉教授北村久美子先生から祝辞を賜りました。また、同時に看護学科同窓会特別奨励賞が本学卒業生、旭川市保健師 宮城明奈さん(3期生)、国立病院機構甲府病院助産師 石橋みちるさん(3期生)、北海道大学大学院保健学研究院助教 リトン佳織さん(4期生)、本学病院の急性・重症患者看護専門看護師 酒井周平さん(8期生)の4名に授与されました。表彰式では、4名を代表して、酒井さんに表彰状・記念品が授与されました。

引き続き「看護学科25周年 卒業生の現在地」をテーマとして、4名の特別奨励賞受賞者によるシンポジウムをオンラインで開催しました。これは卒業生の活躍について広く周知し、今後の発展の機会とするとともに交流を深めるきっかけとするためでしたが、活発な意見交換が行われ、母校を意識する機会ともなりました。シンポジウムの概要につきましては、看護学科HP (<https://www.asahikawa-med.ac.jp/dept/nc/25th/Lecture.html>)で公開しております。

記念式典、シンポジウムの開催に加えて25周年記念事業の一環として、看護学科開設以来1498人になる卒業生の名簿整理と動向調査も実施いたしました。卒業生同士、大学と卒業生とのネットワーク構築や母校の教育についての意見を寄せてもらい、カリキュラムに反映するための準備という意義もあります。こちらも貴重なご寄附を活用させていただくことによって実現できました。重ねて感謝申し上げますとともに、令和8年の30周年に向け、引き続きご支援賜りますようお願い申し上げます。



開学50周年記念事業

本学は、昭和48年に設立し、令和5年に開学50周年を迎えます。

この記念すべき節目に、記念事業として「開学50周年記念基金」を設立し、食堂をはじめとする福利施設等を改修することが決定しました。詳細につきましては、「旭川医科大学基金 開学50周年記念基金 趣意書」を送付いたしますので、ご覧ください。

ご協力のほど何卒よろしくお願いいたします。

旭川医科大学基金への更なるご理解・ご支援をよろしくお願い申し上げます。

お申し込み方法：①クレジットカード、コンビニエンスストアでの払込

②郵便振替払込

③大学窓口への直接払込

※詳しくは、旭川医科大学基金ホームページをご参照ください。

旭川医科大学基金

検索



お問い合わせ

旭川医科大学総務課広報基金係

〒078-8510

北海道旭川市緑が丘東2条1丁目1番1号

電話：0166-68-2118

メール：kikin@asahikawa-med.ac.jp